とやま日季（にっき）

つくる、つながる、とやまの暮らし

2017 春

とやま暮らしの話
とやまの呼吸：雪の大谷
とやまの始点：谷内正太郎氏×石井隆一富山県知事
今日の朝ごはん
おでかけリポート
Toyama Navi
日本橋とやま館
とやまの品：kisenの杯

くらしたい国、富山

《とやま暮らしの話》

富山県・小矢部市在住
住吉剛さん、美樹さん夫妻がつくる出会いのある暮らし

富山県西部の玄関口・小矢部市は、広々とした田園風景と、小矢部川、宮島峡など、清らかな水に恵まれたところ。３つの高速道路の合流点でもあり、県内外へのアクセスにとても便利なまちだ。この地に暮らすのは、住吉剛さん、美樹さん夫妻と、娘の真梨子ちゃん。埼玉県から剛さんの故郷である小矢部市に、２０１４年に移り住んだ。

この地で、兼業農家の４人兄妹の長男として生まれた剛さん。独立心旺盛で、17歳で東京へ単身上京し、コンピュータ関連の会社に就職。以来、ソフトウェア会社のSEやフリーの技術者として働いてきた。

さいたま市の企業に勤めていた２０１１年に、都内の出版社で働いていた美樹さんと出逢った。千葉市生まれの美樹さんは、ティーンズファッション雑誌やタレント本、料理本などの編集者として、約11年間、第一線で活躍し、忙しい毎日を過ごしていた。↖

写真左より時計回りに、美樹さんの手料理、宮島峡、美樹さんおすすめの市内のティーハウス

すみよしつよし・みき：富山県小矢部市生まれで、東京やその近郊でソフトウエア技術者として仕事をしてきた住吉剛さんと、千葉市生まれで東京の出版社で編集者として働いた美樹さん夫妻。2014年に剛さんの故郷に移住し、剛さんはソフトウエア開発、美樹さんは編集・ライター業と、それぞれの分野で活躍中。娘の真梨子ちゃんと、新しい富山暮らしを始めている。

小矢部市：富山県西部の玄関口にあり、石川県金沢市とも隣接。人口は約30,700人。3つの高速道路が交差する交通の要衝には、三井アウトレットパーク北陸小矢部などがあり、買物や県内外へのアクセスに便利なまち。

●写真・左：自宅前の住吉さん家族。　●右：自宅周辺から望む田んぼや剱岳。

↙共通の友人が開催したバーベキューで出会い、打ち解けたふたり。剛さんは、美樹さんの明るく、はきはきした性格に惹かれ、美樹さんは、それまでに出版業界などで出会った人にはない、剛さんの「普通で、ちゃんとしているところ」や、若い時から自立して生活力があるところを新鮮に感じ、惹かれていった。

しばらくして、ふたりは剛さんの職場がある埼玉で暮らし始め、2012年に結婚。2013年に真梨子ちゃんの出産を機に、美樹さんは出版社を退社。そして、2014年にふたりは剛さんの故郷、小矢部市へ移住した。剛さんは「子育ての環境のこともちろんありましたが、長男ですし、富山に帰ってみんなで暮らしたいという思いが、年々、強くなっていきました」と振り返る。現在は実家で、剛さんの父の明雄さん、妹の桃衣さんと一緒に5人で暮らしている。

剛さんは自宅で、フリーランスとして県内外の新しいソフトウエアの開発やウェブ制作の仕事に携わっている。そして美樹さんは、真梨子ちゃんが保育所に通い始めた昨年の春から、子育てや家事もこなしながら、旧姓の澤田の名前で、編集者兼ライターとして新たな仕事をスタートした。それには、次のような思いがあったという。

●写真・左：市内のティーハウス。英国の田舎を思わせるノスタルジックな雰囲気で、優雅なティータイムを。美樹さんのおすすめはアフタヌーンティーセットや英国の田舎料理「コテージパイ」。ステンドグラスのあたたかな光が店内を彩る。 ティーハウス・雑貨 ヘッジホッグ　営業日：土日祝　TEL.0766-54-6351　http://hedge-hog.garden/　●右：自宅では、元は応接間だった部屋を仕事場として２人で共有。美樹さんは限られた時間の中、編集やライター業を効率的にこなしている。剛さんは、朝9時から夜7時頃まで仕事をする規則正しい生活。

「最初は、以前のような仕事に追われてばかりの生活が嫌で、専業主婦として子育てに専念しようと思っていました。もちろん、娘の成長は何よりの喜びですが、いざ暮らしてみると、最初の１年間の、知り合いが少なく、仕事のない生活が結構つらかった。暮らしに特に不満はなかったのですが、育児や家事など、嫁の役割だけでは、どこか心の拠り所がなくて。やっぱり、仕事がしたいと思うようになったんです。そんな時、富山に遊びに来た、東京でブランドコンサルタントをしている高校時代の友人に、『あなたには実績があるから、すぐ動くべき』と言われて、一緒に名刺を作りに行きました。名刺にエディター（編集者）と肩書きを入れたとき、ああ、やっぱり私はエディターをやりたかったんだ、と自覚したのです」

　子育ての時間を大事にしながらも、自分自身が自立して、真梨子ちゃんが成長したときには、子どもから憧れられる存在でありたいと思うようになった美樹さん。以前勤務していた出版社から、ブログのライターの仕事をもらいながら、県内のイベントにも積極的に参加して人脈を広げ、次の仕事へのチャンスを掴んでいった。

●写真・左：鶏のもも肉を、柚子味噌で味付けして、スキレットという鉄のフライパンでふんわり焼き上げる。ほかに、マッシュルームのスープ、アンチョビのマカロニサラダ、カブの浅漬け、おむすびなどを1時間ほどで仕上げる。料理講師や料理本の編集者も務めた美樹さんならではのレシピ。　●右：子育て雑誌のファッションページの編集を担当している美樹さん。この日は編集部で長靴特集の撮影の立ち会い。独自のセンスで構成したページは、人気の企画。

昨年春からは、イベントで知り合った子育て雑誌の編集長を通じ、美樹さんが得意とするファッションページの企画・編集の依頼を受けている。ほかにも、友人や知り合いの紹介で、県内の雑誌の編集やライターの仕事が次々と決まり、地元新聞社が発行するスポーツ雑誌のライターとしても活躍中だ。

「この仕事が心から好き。一旦離れたことで改めて認識しました。今は、独身の時とまた違った新鮮な気持ちで仕事に向き合えていて、毎日が楽しいです」

真梨子ちゃんの保育所の送り迎えがあり、仕事ができる時間に制限があるため、時間をより大事に使うようになったそう。そんな中、朝晩の食事の支度は美樹さんが担当。料理講師の経験があるとのことで、その腕前はなかなかのものだ。

「車で15分ぐらいのところにいくつも大きなスーパーがあってとても便利ですし、親戚から野菜などの食材をもらうことも。今日、鶏肉の味付けに使った柚子味噌は、剛さんの母方のおばあちゃんの手づくりです。それに、富山はスーパーのお惣菜のレベルが高くて、すごくおいしいんですよ」。地元の食材や惣菜も取り入れながら、家族の食事を手早く準備できるように工夫を凝らす。

●写真・左：クロスランドタワー。高さ118mのタワーには、地上100mの展望フロアがあり、散居村の田園風景、名建築をモチーフにしたメルヘン建築物、雄大な北アルプス、走行する北陸新幹線も見渡せる。周辺には大きな広場や大型遊具があり、真梨子ちゃんも大好きな遊び場の一つだ。　●右：近所の神社の境内で遊ぶ美樹さんと真梨子ちゃん。剛さんも幼い頃、よく遊んだ場所。　●左上：クロスランドタワー外観

自宅から車でほど近い場所には、アウトレットやスーパーなどの大型商業施設がある一方で、家のまわりには住吉家の田んぼが広がり、真梨子ちゃんがよく遊ぶ神社、初夏にはホタルが舞う川もある。剛さんも子どもの頃、よく遊んだお馴染みの場所ばかり。「本当に静かで、暮らしや子育てに抜群の環境は、お金では買えないものですね」と語る。また、剛さんは父親とともに営農組合の一員として、地域の田植えや稲刈りに汗を流したり、美樹さんと一緒に祭りなどの行事に参加している。

「帰って来て初めて、地域とはこんな風にみんなの力で回っていくんだということを実感できて、今、とても新鮮な思いでいます。今後、何か役に立てることがあれば協力していきたいですね」と話す剛さん。美樹さんは将来、自宅の広い敷地を生かして、新たな家を建てるのが夢だとか。そして、真梨子ちゃんが大きくなったら、編集者として富山と東京の両方で仕事ができたらとも考えている。

お互いにとって心地いい、富山での暮らしの基盤を少しずつ創り始めている住吉さん夫妻。やりたいことに正直に向き合いながら、自分たちらしい暮らしのあり方を、見つけ出したようだ。

＊

とやまの呼吸

春から冬への時間旅行

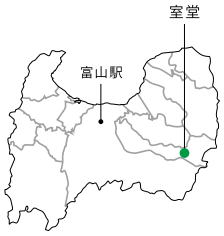
桜の盛りも過ぎた4月中旬。立山黒部アルペンルートの全線開通により、立山連峰は、長い冬の眠りから目覚め、ようやく春を迎える。

立山駅から一路室堂へ。天狗平を過ぎると標高2300mを超え、春から冬へ時間を遡りながらバスが雪原を縫うように登り、やがて車窓は深く切り立った雪壁に囲まれる「雪の大谷」へ。室堂ターミナルを起点に歩行者に開放される「立山・雪の大谷ウォーク」期間の散策は格別。

高さ20mに迫る雪壁は荘厳で、白銀の摩天楼の底から見上げる空はどこまでも青い。

室堂平で雪原散策もおすすめ。間近に大迫力の剱岳がそびえ、どこまでも広がる真っ白な海原を進むように、雪の中を歩くことができる。

立山黒部アルペンルートは、ケーブルカーや高原バスなど乗り物を乗り継ぐたびに標高や気温が変わり、季節を遡る時間旅行が楽しめる。



雪の大谷：標高2,450mにある立山室堂は世界有数の豪雪地帯。なかでも吹きだまりになる「大谷」は特に積雪が多い場所。室堂ターミナルから約500mの区間を除雪することでできる高い雪の壁を「雪の大谷」と呼ぶ。平成29年の「立山・雪の大谷ウォーク」は4月15日(土)から6月22日(木)まで実施予定。

㊐立山黒部貫光（株）営業推進部WEB・PRセンター
TEL.076-431-3331　http://www.alpen-route.com/

石井隆一富山県知事の
とやまの始点

ゲスト＝

谷内正太郎氏

国家安全保障局長 兼 内閣特別顧問

外交のエキスパートとして、政府の中枢で活躍する国家安全保障局長の谷内正太郎氏と石井隆一富山県知事が、日本の外交・安全保障や、富山県と諸外国との交流、協力等について語り合いました。

国家安全保障局の役割と日本外交のあり方

石井　谷内さんは、高校までを富山県で過ごされ、東京大学大学院修了後、外務省に入省されました。その後、霞が関の外交分野で抜きん出た存在として活躍され、外務事務次官を3年という異例の長さで務められるなど、外交の大変なエキスパートであり、富山県に対しても、諸外国との関係をはじめとする様々なアドバイスをいただき、大変感謝しております。

　現在は国家安全保障局長をお務めになり、日本の外交や防衛の基本政策を定める責任者でいらっしゃいますが、まずは、国家安全保障局の役割について解説していただきたいと思います。

谷内　国家安全保障局は、国家安全保障会議の事務方であり、私はその責任者を務めています。国家安全保障会議は、総理大臣を含む5人の閣僚が中心となり、日本の外交・安全保障の大きな方向性を議論し、共通の理解を持つために設置されたもので、一言で言うと、日本の外交・安全保障の司令塔です。

　これらの組織をつくることによって、より長期的・戦略的な視点をもって、日本の外交・安全保障政策を企画、立案、展開できるようになりました。発足して3年が経ちましたが、それなりの実績も上げ、存在感も高まってきていると思っています。

石井　谷内さんが事務次官を務めておられるころ、当時の麻生外務大臣が、外交政策の新機軸として「自由と繁栄の弧」を提唱され、現在の安倍政権の外交方針にも大きな影響を与えています。これについては、主に2つの意義があったと言われています。

　1つ目は、日本外交の地理的視野を、太平洋・アジアから一気に拡大させたことです。北東アジアから、中央アジア、トルコ、中・東欧にバルト諸国まで、ユーラシア大陸の外縁に「弧」をイメージし、積極的な外交を展開された。2つ目は、それだけの大きな仕事をするための旗印として「価値の外交」を掲げ、民主主義、自由、人権、法の支配、市場経済といった普遍的価値を重視されたことです。

　この「自由と繁栄の弧」の考え方にも、谷内さんが大きな影響を与えられたと思います。このような考え方の根底にある、谷内さんが考える日本外交のあるべき姿、谷内さんが外交官として心がけておられることについてお聞かせください。

谷内　私は、「凛とした志の高い外交」ということを心がけて仕事をしてきました。

　まず「凛とした」というのは、過去について反省すべきところは反省しつつ、その上で、対等の関係で毅然とした態度で臨み、主張すべきことは主張し、実行すべきことは実行するということ。「志が高い」というのは、例えば個人でも、自分のためだけでなく、世のため人のために尽力する人こそ志が高いと言えるでしょう。国家についても同じで、自国の利益だけでなく、国際公益も考慮し、その両立を志向する外交こそ、志の高い外交だと考えています。

ロシアと日本、そして富山県

石井　平成19年に、富山県の漁船「第88豊進丸」がロシアに拿捕された事件がありました。当時、外務事務次官を務めておられた谷内さんに、乗組員の解放と漁船の早期返還についてご相談したところ、「従来、ややもすると、ただ『穏便に』ということになりがちな面があったが、今回の事案の場合、筋道を通して公の場で議論した方がよいのではないか」というご意見でした。私もその通りだと考え、農林水産省や地元関係者とも相談の上、政府として、日本で初めて国際海洋法裁判所に提訴していただくこと

になりました。おかげさまで、過去の事例に比べ比較的早く、船長や船員、漁船を返還してもらうことができ、改めて感謝申し上げます。

谷内　第88豊進丸の事件は、法の支配という観点からきちんと対応する必要があると考えていましたので、結果的には非常に良かったと思っています。

石井　安倍政権はロシアとの関係の改善に非常に熱心に取り組まれており、昨年末にもプーチン大統領が来日され、安倍総理との首脳会談が行われました。富山県は北方領土の元島民が北海道に次いで多く、首脳会談がマスコミで度々取り上げられ、県民の期待も高まったこともあって、経済面で話が進んだ反面、領土問題では「がっかりした」という声も少なくないように思います。大変なご苦心の積み重ねがあると思いますが、今回の首脳会談の成果や今後の展望についてお話しいただけますか。

谷内　ロシアとの平和条約交渉は戦後の長年の懸案で、未だに結ばれていないことは非常に由々しいことです。安倍総理は、外交政策の最優先課題として、プーチン大統領との間で個人的な信頼関係を築きつつ、この問題の解決のために大きな努力をしなければならないとお考えです。今回の会談は、安倍総理とプーチン大統領との間での16回目の会談であり、プーチン大統領にこれほど多く会っている主要国首脳はいないと思います。築かれつつある信頼関係に基づいて、平和条約交渉に道筋をつけ、明るい展望を開くために、今回の会談が開かれました。

　領土に関する報道が過熱し、国民の期待感を上げる結果になりましたが、70年以上解決していない問題が、急にトントン拍子で進むことはあり得ません。外交や国際関係では、必ず大きな障害があり、我々の期待や希望どおりに平穏に進むことはありません。それを乗り越えるのが政治的リーダーシップで、安倍総理は自らの政治生命をかけて、平和条約締結に向けて取り組む決意であり、今回の会談はその第一歩ということです。

　平和条約締結に向けての課題としては、領土の帰属問題をはじめ、北方領土における共同での経済活動をどう進めるか、また、安全保障、さらには旧島民の方々や現在島に住んでいる方々の地位など、数多くあります。ここまで来るだけでも非常に大変だったというのが率直なところですが、今後とも、総理のリーダーシップのもとで、粘り強く取り組んでいくべきだと考えています。

石井　今回の会談では、官民合わせて80項目の経済協力と、北方領土での共同経済活動について合意されました。このうち経済協力については、富山県としても、意欲ある県内企業が参加できるように支援したいと思っています。

谷内　昨年5月のソチでの日露首脳会談において、「快適・清潔で住みやすく、活動しやすい都市づくり」「中小企業交流・協力の抜本的拡大」など、8項目の経済協力を日本から提案しました。これに基づき、8項目を細分化した80項目の分野で、極東を中心にロシア全土で実施することになりました。より広いエリアや分野で取り組むことになりますので、今後の交渉に向け、非常にいい環境づくりになるのではないでしょうか。合意の中には、都市づくりの問題や中小企業の活動、人的交流なども入っており、富山県の皆さんが活躍いただける分野がいろいろあると思います。

石井　富山県としては、ＪＥＴＲＯとも協力して、県内企業のロシアとのビジネス等をサポートしていきたい。例えば医薬品については、平成26年の富山県の医薬品生産額は9年前の2.3倍の６１６３億円に達し全国2位となり、27年には1位になるといわれています。課題もあると

思いますが、高い製剤技術力等を活かし、ロシア側とウィン・ウィンの関係で新たなビジネス展開ができることを期待しています。

トランプ大統領と日米同盟

石井　アメリカでは、昨年11月に大統領選挙が行われ、アメリカ第一主義を唱えるトランプ氏が勝利しました。世界の秩序をより自由で民主主義的なものに変革することを大義の一つとされてきたはずの従来の大統領とは政治の理念や手法が相当に違う印象があり、世界中が今後の政策に注目しています。安倍総理は、日米同盟は「地球儀を俯瞰する外交」の基礎であり、希望の同盟だとされていますが、トランプ氏の率いるアメリカとの関係は、今後どのように展開していくとお考えでしょうか。

谷内　トランプ氏は、歴史的にも珍しい激烈な選挙戦を戦う中で、自分は今までの政治家とは違うというアピールをされ、それが国民に支持された部分があったのだろうと思います。

　今後の日米関係についてですが、まず、両国は自由や民主主義という価値観を共有し、経済の相互依存関係も、ほかの国とは比較にならないほど緊密です。また、日米安保条約により、日米同盟はアジアにおいて平和と安全を提供する国際公共財となっています。それらのことを踏まえれば、トランプ氏なりの味付けはあるかもしれませんが、日米関係の基本は変わらないだろうし、変えてはいけない。むしろ、それを更に強化していくことが、日本の進むべき道だと思っているので、総理と次期大統領が話し合いの場を持つことは非常に大事だと思いますね。

　安倍総理は、日米同盟を基軸としつつ、地球儀を俯瞰する外交、積極的平和主義を外交方針として掲げ、国家安全保障局も、それを支えて政策を展開してきました。外交方針への国民の信頼感や期待が安倍政権の高い支持率を支えていると思いますので、非常に不透明な世の中ではありますが、この座標軸はきちっと守り進むことが大事だと思っています。

石井　トランプ次期大統領はロシアとの関係の修復に熱意をみせる一方、中国との関係については、台湾に対するスタンスも含めて、これまでのアメリカの外交政策の見直しを示唆されているようにも感じます。いかがお考えでしょうか。

谷内　今の米露関係は、ウクライナや中東の問題もあり、戦後最悪とも言われています。この状況は世界の安全と平和にとっては好ましい状態ではありませんし、トランプ氏がロシアとの関係改善に大きな役割を果たされるとすれば、ロシアとの関係改善を目指す日本にとっても、非常に良いことです。

　また、中国や台湾との関係では、台湾の蔡英文総統に電話したり、一つの中国にこだわらないという発言をしたりと、トランプ氏なりの新しいエレメントを入れていきたいと思っておられると思います。他方中国は、反発を抑制して冷静にアメリカがどう出てくるのかを見ようとしていますが、これは、中国がアメリカとの関係を重視していることの表れであり、日本にとっても悪くないことです。

人と人の交流が国と国をつなぐ

石井　安倍総理は地球儀を俯瞰する外交の一環として、様々な国と意欲的に交流されています。富山県でも、スイスのバーゼルとの医薬品の製剤技術や学術・文化の交流に関する協定（平成21年）、タイ工業省とのパートナーシップに関する覚書（平成26年）、インド・アンドラプラデシュ州との交流・協力に関する覚書（平成27年）、ベトナムの計画投資省との経済交流に関する覚書（平成28年）を各々締結するなど、各般の取組みを進めています。今後も、県内企業のニーズ等を踏まえ、各国と経済交流等を一層深めていきたい。

谷内　歴史的に見て、外交や安全保障の関係は、長らく国と国、政府と政府の付き合いでした。しかし、今ではそれだけでなく、国民同士や、地方公共団体や企業、ＮＧＯ、旅行客を含めたトータルな付き合いになっており、そのような交流が深まることは外交基盤の強化にも繋がります。あの国とはいい関係が必要だと多くの国民が思っているときに、政府がそれと逆の方針をとることはできません。逆に言うと、政治的な問題によって、様々な分野での交流が全てストップしてしまうようなことは避けたいですね。日本国民は優しい気持ちが強く意識も高いので、政府間の関係がおかしくなっても、普段からの交流は維持しようとしますが、相手がある問題ですから、うまく行かないこともありますね。

石井　富山県は、3年前に中国の遼寧省と友好県省30周年を迎え、この先もさらに友好・経済交流を進めようと、協定を結び直しました。当時は尖閣諸島問題が特に緊迫していた時期で心配したのですが、先方も、省と県の間は仲良くしようと考えてくれていました。また、遼寧省の大連や瀋陽に、富山の企業や県庁で働いていた方、富山大学への留学経験者などを中心とした富山ファン倶楽部があり、３８０人程がメンバーに入っています。30周年行事で訪問したときに、省政府とは別に、１００名位の方が参加して歓迎会を開催し、最後に、日本語で富山県の「ふるさとの空」を歌って下さったことにも大変感動しました。自治体同士だと国同士よりは心、気持ちが通いやすい面もあり、こういった地道な交流が大切だと改めて感じた次第です。

タイには三度、インドやベトナムには各々二度、県知事として訪問していますが、各国とも非常に親日的な感情を持っていただいている方が多い。例えば、インド訪問の際、第2次世界大戦後の東京裁判で、各国の判事のうち唯一インドのパール判事だけが、事後的に戦争を裁く行為そのものを批判されたことに感謝の気持ちを持つ日本人が多いことを伝えたところ、インド側の政府関係者などから、我々もインド独立運動の英雄チャンドラ・ボースを、当時の日本が支援したことを記憶しているという発言があり、あらためて日本とのゆかり・絆を感じ、こうした信頼、友好の関係を維持し、経済や文化の面の交流・協力を深めていきたいと思いました。

世界中から選ばれる観光地を目指して

石井　富山県は国際観光にも力を入れ、12～13年前に比べて立山黒部アルペンルートの外国人の観光客数は年間約24万人と、10倍に増えました。アジアからの観光客が大半ですが、最近は、欧米やオーストラリアからの観光客も徐々に増えつつあります。

食の評価も上がってきており、ミシュランのレッドブック「富山・石川（金沢）２０１６特別版」が昨年６月に出版され、唯一の三ツ星に本県の「日本料理　山崎」が選ばれました。ゴ・エ・ミヨ・ジャポンも、日本版第１号の対象を東京と北陸３県にしていただいただけでなく、３人選ばれた最高シェフ賞の１人に、本県のホテル雅叙園のレストラン「レヴォ」の谷口シェフが選ばれました。欧米豪の観光客はミシュランやゴ・エ・ミヨを読んで旅行する方が多いので、もっと多数の方に富山に来ていただける良い契機になったと考えています。

谷内　観光で人気があるということは、その地域は安全で、美しい自然環境、あるいは歴史遺産があり、人の心も優しいイメージがあるということです。政府は、２０２０年に４０００万人の訪日客を目指していますが、いいリピーターが増えて、異文化や外国人との接触の機会が増えることはいいことですね。

富山の街は清潔感があり、エレガントで落ち着いた雰囲気が素晴らしい。食べ物も、東京よりおいしいものがたくさんありますね。

石井　昨年、Ｇ７の環境大臣会合が富山県で開催されましたが、各国の大臣など（７人のうち５人が女性、うち１人は代理）には、富山の食や自然景観、伝統的な街並みなどをとても気に入っていただき、「この次は子どもを連れてゆっくり来たい」などのご発言もいただきました。地方創生の時代を迎え、グローバルに活躍するものづくり企業などが多くあることも大切ですが、伝統的な街並みや工芸などの文化力、そこに働き暮らす人の魅力といった、街の佇まい、地域の風格などが大事になってきたと思います。

若者へのメッセージ

石井　谷内さんには、平成広徳塾の塾長を引き受けていただき、東京でも谷内塾を開催されるなど、若い世代の育成に大変熱意を持っておられますが、最後に、若い人へのメッセージをお聞かせいただきたい。

谷内　世代間の対話を強化していく必要があると思っています。若い人は積極的に、年上のいろいろな経験者の話をよく聞いてほしいですね。また、「どのように生きるべきか」という人生論的な視点があればもっといい。逆に年長者は、生きる上での姿勢を作るような刺激を、若い人に与えてほしいですね。

インターネットが普及して世の中が便利になり、その気になれば、どのようなことでも学習できます。それらを大いに活用し、自分の生き方についてよく考え、やりたいものを見つけたら、それに向かって邁進してほしい。志と気概を持って生きてほしいですね。

石井　今後も、日本の外交・安全保障の第一人者としてますますご活躍いただくとともに、富山県にも、適時にご助言、ご指導をいただければ有難く思います。今日はありがとうございました。

対談日　２０１７年１月11日

谷内 正太郎　やち・しょうたろう

国家安全保障局長兼内閣特別顧問（国家安全保障担当）。富山県出身。東京大学大学院法学政治学研究科修士課程修了。69年、外務省入省。在ロサンゼルス総領事、条約局長、総合外交政策局長、内閣官房副長官補を歴任し、05年、外務事務次官に就任。退任後、外務省顧問、内閣官房参与など。14年より現職。

石井 隆一　いしい・たかかず

富山県知事。東京大学法学部卒。石川県、北九州市、静岡県などを経て、地方分権推進委員会次長、自治省財政審議官、総務省自治税務局長、消防庁長官などを歴任。04年より現職。03年から06年まで早稲田大学大学院客員教授。主著に「『元気とやま塾』入門―高志の国と世界を結ぶ」「分権型社会の創造」など。

富山の達人たちのとっておきの朝

今日の朝ごはん

魚津市

河内美穂さん

肇さん

今朝のメニュー

・入善てらだファームの
※プチヴェールの胡麻酢和えと
紫カリフラワーと玉ねぎのピクルス
・魚津経田沖で釣ったヤリイカの粕漬け
振り柚子とアオリイカの沖漬け
・桝田酒造の酒粕を使った
サゴシの粕漬けの焼き物
・ハマチの漬け白胡麻がけ
・富山湾のタイの松皮造りと削ぎ造り
・サゴシの粕漬け焼き
・自家製昆布巻蒲鉾に焼き雪白ねぎと
プチヴェールの澄まし汁
・酵素玄米ごはんと白米のおにぎり

※プチヴェール＝芽キャベツとケールを交配させた新種の野菜

美穂さんが設計した清潔感あふれる純白のシステムキッチンは、調理器具、調味料などが完璧に整理整頓されている。調理師専門学校時代に調味料の大切さを学び、原材料にもこだわる。自然食の栄養価やおいしさに目覚めてから、砂糖は上白糖を使わず、甜菜糖やキビ糖を使用。九鬼産業の胡麻油がお気に入りで、特大サイズの業務用を常備している。

かわうちみほ、はじめ
生まれは東京都の河内美穂さん。中学生の頃から魚津で暮らし、県外で就職。結婚後に富山へ戻る。「鮨蒲本舗 河内屋」の取締役・総務を担いながら、生来のセンスを活かして商品企画やプロデュースを手掛ける。夫で代表取締役社長の肇さんは神奈川県出身。子育てが一段落した今、余暇は趣味の釣りにいそしんでいる。
鮨蒲本舗 河内屋　http://www.kamaboko.co.jp

あいの風とやま鉄道魚津駅から滑川方面へ少し歩くと、創業70年を迎える老舗「鮨蒲本舗 河内屋」がある。海の幸が鮨ネタのように蒲鉾にのったお洒落な「鮨蒲」を受け継ぐ河内美穂さん、肇さん夫妻。時間に追われない休日の朝ごはんは、楽しみながら作り、ゆっくり味わいながら寛ぐ。おふたりが大切にしているひと時だ。

この日、食卓中央の角皿に盛られたのは鯛のお造り。歯ごたえと舌触りの違いが楽しめるよう、松皮造りと削ぎ造りに切り分けてある。椀物は自家製昆布巻蒲鉾の澄まし汁。蒲鉾が引き立つよう、カツオ節ではなく、風味が柔らかいマグロ節と昆布で丁寧に出汁をとり、寒に耐えて糖度が増した雪白ねぎを焼いて甘さを引き出した。アオリイカの沖漬けとヤリイカの粕漬けは、釣り好きの肇さんが魚津経田沖で釣り上げ、保存用に漬けにしておいたもの。プチヴェールの胡麻酢和え、紫カリフラワーと玉ねぎのピクルスが並ぶと食卓が一層鮮やかになった。

お造りと、そこに添えられた極細の大根とみょうがの端(つま)を見れば、作り手の腕は一目瞭然だが、感動するのはその味で、どれもこれ以上動かせない絶妙のポイントで味が決まっている。実は美穂さん、調理師免許取得者。自ら使いやすく設計したというキッチンは、見事なまでに整然としている。「妻は料理の腕も知識も高いので、毎日おいしい思いをさせてもらっています」と、肇さんは妻に対する尊敬と感謝の念を隠さない。

地元の海で獲れた新鮮な魚介類に、入善てらだファームをはじめとした県産野菜、桝田酒造の酒粕、醤油は小矢部市の畑醸造製を愛用。料理を引き立てる器にもこだわって、漆器は魚津の鷹休漆器店、青磁は富山市岩瀬町の釋永岳さん、ガラスの器は富山ガラス工房の作品を使うなど、食卓は地元愛にあふれている。

「味を求めると、素材が力強く、栄養価も高い無農薬や有機栽培のものになりますし、鮮度を極めると、地元のものになります。器もそうですが、作った人が身近で顔が見えるのが良いですね」と美穂さん。河内夫妻の幸福な時間は、口福で満たされている。

日常を愉しむ富山人が案内します。
大切な場所 好きな時間

おでかけリポート

冬の富山には、
身近な感動がいっぱい！

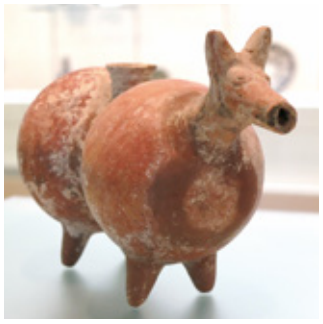
写真と文：上市町・伊東将太さん

富山県上市町を拠点にデザインの仕事をしています。また、「e'conte」（エコンテ）という地域の魅力を発信する団体や商工会青年部にも所属し、様々な企画に携わらせていただいています。上市町は富山市内にも山間部にも15分程度で行ける立地。今回は私の身近にある魅力、冬の息抜きスポットをご紹介します。是非スマホをオフにしてお出かけください。

巨大かまくら、幻想雪灯篭、里山冬の遊び

◎ 白萩南部公民館（種・三世代交流冬の集い／2017年1月28日、29日）

巨大かまくらや雪像作り、ソリ用大滑り台。雪深い上市町種地区では、豊富にある雪を活用した雪遊びを思い切り楽しめるイベントが年に1回開催されている。前日の夜に数時間だけ現れる雪灯篭のキャンドルイルミネーションも密かに話題。雪国富山でも年々雪が減り、雪遊びを楽しめなくなった昨今、このイベントは本当に貴重！ 若い世代が繋げていかなくては。



デザインの原点をみる、博物館の様な美術館

◎ 西田美術館

中国や中東、エジプト、ローマ。各地からの出土品が集まるアートの枠を超えた常設展。「かわいい！」「モダン！」なんて思ったものがなんと紀元前作・・・。人類の美的感覚は紀元前から変わってない？なんて、作者名のない展示品から考えさせられる。2階に常設展示されている「ロシア・イコン」も、古いものは本国でもほとんど残っておらず、歴史的にもかなり貴重なものといえる。

感動的な通勤タイム

◎ 通勤路と職場駐車場からの景色

初夏、田んぼに水が張られてできる一面の水鏡のように、雪の時期の晴れた日には10分程度の通勤路のありとあらゆる風景が感動的なまでに一変する。ここは実に化粧映えのする街だと思う。通勤時間なんて大概憂鬱なものだけど、こんなに天気のいい日は本当に幸せな時間に変わる。職場を通り過ぎてしばらくドライブしてしまうこともサムタイム時々。

新雪バフバフ 森林浴で深呼吸

◎ 眼目山立山寺（がんもくざんりゅうせんじ／通称さっかの寺）

森林セラピー基地にも認定されている森を有する「さっかの寺」。前日に降った雪でふかふかの栂（とが）並木をバフバフと進んだ先にある「立山寺の大椎」という大きな木の前で深呼吸。不思議と気が落ち着きます。この雪の中でも参道にはすでに足跡があり、来る人は来るんだなぁと思ったところに人影発見！ 人影は「哲学の道」と呼ばれる更に奥の散策ルートへ。健闘を祈ります！

モヤモヤしたらお不動さん参拝

◎ 大岩山日石寺&門前街（写真右：そうめん金龍）

毎年夏になると県内外各地から参拝客が訪れる日石寺。門前街のそうめんと合わせて夏の風物詩となっていますが、冬もいいんです。お不動さんを参拝して門前街でにゅうめん。単に温かいそうめんと侮るなかれ、これを知ってからはそばでもうどんでもなくにゅうめんが食べたくなることもしばしば。二日酔いで不機嫌な胃にもスッと入るにゅうめんは胡椒がよく合う。

かがやいて　水・空・緑のハーモニー
第68回全国植樹祭を富山県で開催します。

5月28日（日）、魚津桃山運動公園を主会場に、第68回全国植樹祭を開催します。全国植樹祭は、豊かな国土を支える森林や緑に対する理解を深めるために行われる国土緑化運動の中心的行事です。この大会を通じ、本県の森づくりの取組みを全国へ発信するとともに、県民参加の森づくりを一層推進します。

㊊第68回全国植樹祭富山県実行委員会（事務局：富山県農林水産部森林政策課全国植樹祭推進班）　TEL.076-444-4077（直通）　FAX.076-444-3390
第68回全国植樹祭サイト http://www.68syokujusai-toyama.jp/

富山くらし・しごと支援センターが
移住をサポートします。

移住の相談や、経験豊富なキャリアカウンセラーによる就職のサポートはもちろん、定住コンシェルジュによる現地案内や移住後の困りごとの相談なども承ります。とやま暮らしがいいなと思ったら、富山くらし・しごと支援センターへお気軽にご相談ください。

㊊富山くらし・しごと支援センター　◎有楽町オフィス（東京・有楽町／東京交通会館内）くらし TEL.080-8870-2456　しごと TEL.070-2798-7878　◎白山オフィス（東京・白山／東京富山会館ビル）TEL.0120-108-250　◎富山オフィス（富山駅前／パソナ・富山内）TEL.076-431-3691　http://toyama-teiju.jp/

NIHONBASHI TOYAMA

日本橋とやま館

ショップフロア：
10:30～19:30　TEL.03-3516-3020
和食レストラン：
11:30～14:30／17:00～22:30（日・祝：～21:00）　TEL.03-3516-3011
バーラウンジ： 11:00～21:00

東京都中央区日本橋室町1-2-6　日本橋大栄ビル1F　TEL.03-6262-2723（代表）
http://toyamakan.jp

アンテナショップで全国初！「外国人観光案内所」に認定

日本橋とやま館は、外国人観光客に対応するため、英語が堪能なコンシェルジュを常時配置しており、2017年2月28日に、アンテナショップでは全国で初めて、日本政府観光局が認定する「外国人観光案内所」に認定されました。これを契機に、外国人観光客への情報発信をさらに強化し、富山県の魅力を世界に発信してまいります。

富山県
とやま日季　2017年　春号　2017年4月発行　企画・発行：富山県地域振興課　〒930-8501　富山市新総曲輪1-7　TEL.076-444-9605　FAX.076-444-4561
編集：北陸博報堂　取材・文：タダカツ、寺崎康子　写真：室澤敏晴、東澤光明、松井洋貴　デザイン：宮田裕美詠、柿本萌　印刷：とうざわ印刷工芸

kisenの杯

有限会社四津川製作所　高岡銅器の鋳物づくりに長年携わり、なかでも同社の銅製の香炉は、屋号から生まれた「喜泉堂」のブランド名で国内外にファンを持つ。江戸や明治の頃から伝わる意匠を、高度で緻密な技で再現した美しさは必見だ。四津川元将さん、晋さん兄弟は鋳物職人の父から、銅器づくりの原点である原型の大切さを学んだ。kisenはその伝統を軸に生まれた現代のプロダクト。高いクオリティへのこだわりが、現代の人々を惹きつけるものづくりへと受け継がれている。kisenはその後も新シリーズが誕生し、海外でも受賞するなど高い評価を受けている。
TEL.0766-30-8108　http://www.kisen.jp.net

日本のモダンを、手のなかに。

ほっと一息、日本酒をいただく至福のとき。その一杯を、さらに特別なものにしてくれる器がある。ｋｉｓｅｎの「Ｇｕｉｎｏｍｉ　Ｓａｋｅ　Ｃｕｐ」は、高岡銅器伝統の技と石川県の山中漆器の技とのコラボで生まれた逸品だ。

「ＦＵＪＩ」、「ＢＡＭＢＯＯ」など、モチーフは日本の風物。水目桜の繊細な白い木地、伝統の着色法で彩られた真鍮、それらをつなぐ滑らかなラインが人々を魅了する。金属で重心が安定する分、木杯は独創的なフォルムが可能になった。２０１４年度のグッドデザイン賞を受賞し、銀座三越をはじめ、国内外で販売され、人気を博している。

ｋｉｓｅｎは四津川製作所代表取締役の四津川元将さんと同ブランドプロデューサーの四津川晋さん兄弟が手がけた新しいプロダクト。デザインは晋さんが担当するが、驚くことに、元々はデザイナーではなかったとか。

「鋳物の機能性を最大限に引き出し、日本人になじむモダンを目指していくなかで、必然的に生まれた形」と語る。代々、高岡で磨かれてきた審美眼が、ｋｉｓｅｎにも受け継がれている。